



# 北海道環境の村 実践マニュアル

ver. 2





---

# はじめに

---

北海道は、周辺を海に囲まれ、広大な森林や湿原、清らかな水をたたえる湖沼や河川、そこにいきいきと暮らす野生生物などの豊かな自然に恵まれており、この自然環境から様々な恩恵を受けています。

このような中、北海道の「環境の村事業」では、「道民一人ひとりが参加し協力しながら、持続可能な社会を築いていくため、環境保全意識を持ち主体的に行動できる人づくりをすすめるための体験学習の場」となるよう、これまで様々な体験型プログラムやセミナーを行ってきました。

2020年4月から小学校を皮切りに順次実施されている「学習指導要領」において、その前文に、一人ひとりの児童・生徒が「持続可能な社会の創り手」となることが明記されるようになったほか、ウィズ・コロナの期間が当面は続くことを前提に、人々の環境に配慮する意識が相当変わってくることも想定され、今後、環境教育の重要性は、ますます高まってくるものと思われまます。

今回、道民の皆様の環境配慮意識を向上させ、環境保全のための継続的な実践行動につながるよう、これまでの「環境の村事業」で行ってきたものを集約し、「環境教育資料集」としてまとめました。

本資料集が、北海道らしい環境教育を推進する一助として、また、各市町村や各学校あるいは各地域での環境教育現場における参考の一つとして活用いただければ幸いです。

---

# 目次

---

環境教育とSDGs	3
環境の村事業の10年レポート	9
アースファミリーキャンプの実際	10
エコロジーワークショップの実際	19
エコセミナーの実際	29
エコサロンの実際	33

## 環境教育とSDGs

体験型の環境教育を特徴とした環境の村がスタートしたのは2002年。その年にヨハネスブルグで3回目の地球サミットが行われ、その場で日本政府から「持続可能な開発のための教育」を国連の事業として実施するようにと提案があり、その後の国連総会で採択され、2005年から「国連持続可能な開発のための教育の10年」がスタートしました。この動きと連動して、2003年には国内で環境教育推進法が成立し、翌2003年より実施されました。このような世界の動きの中で、北海道における環境教育事業として環境の村がスタートしました。その後、世界ではESDがMDGsと合流するかのようになり、2016年よりSDGsに取り組んでいます。

環境の村事業のまとめを作るにあたり、多くの道民の皆さんにとっての参考となり、全道において環境教育事業の取り組みが行われる際の参考となるように、前段としてその歴史を簡単にまとめてみました。全体の文脈を理解し、今求められる取り組みを行っていただければ幸いです。

### 1 環境教育の始まり

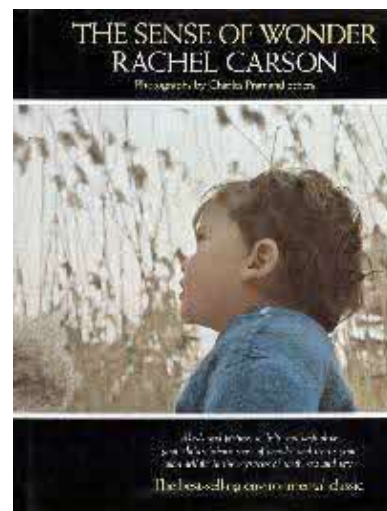
「環境教育」という言葉の起源としては、1948年に行われた国際自然保護連合の総会で Environmental Education といった表現が使われたのが始まりとされています。その後、経済発展に伴う環境汚染や公害が社会の関心事となり、1962年にはレイチェル・カーソンが『沈黙の春』を出版し、世界中に環境への危機を科学的な根拠に基づいて警告し、世界中で環境運動が起こります。その結果、アメリカでは1970年に環境教育法が成立します。

1972年にはストックホルムで国連人間環境会議が初めて開催されます。地球レベルで環境について語った初めての会議として「人間行動宣言」が採決されました。この「人間環境宣言と勧告」の中で、環境教育は環境問題解決のためには必須の活動であると確認するに至り、国連教育科学文化機構（UNESCO）に「あらゆるレベルの教育機関及び直接一般大衆とくに農山漁村および都市の一般青少年及び成人に対する」国際環境教育プログラムの設置を提言（勧告86）します。この結果、1975年に国連環境計画（UNEP）が設立され、環境教育を推進していくこととなります。

この頃、アメリカでは環境教育法が成立し、教育分野ではProject Learning Treeという体験型の環境教育教材が開発され、それまでのアメリカの野外教育に環境教育が大きなテーマとして加えられ、野外における体験を通じた環境教育が発展していきます。

#### \* ポイント・・・レイチェル・カーソンと環境教育

『沈黙の春』の著者レイチェル・カーソンはアメリカの海洋学者として、海をテーマにした書物を多く残しています。また、晩年に書かれた『センス・オブ・ワンダー』はアメリカの環境教育者の中ではバイブルと呼ばれている名著で、子どもたちの自然体験における大切なメッセージが書かれています。アースファミリーキャンプを実施される方々の必読の書物の一冊です。



## 2 環境教育の目標

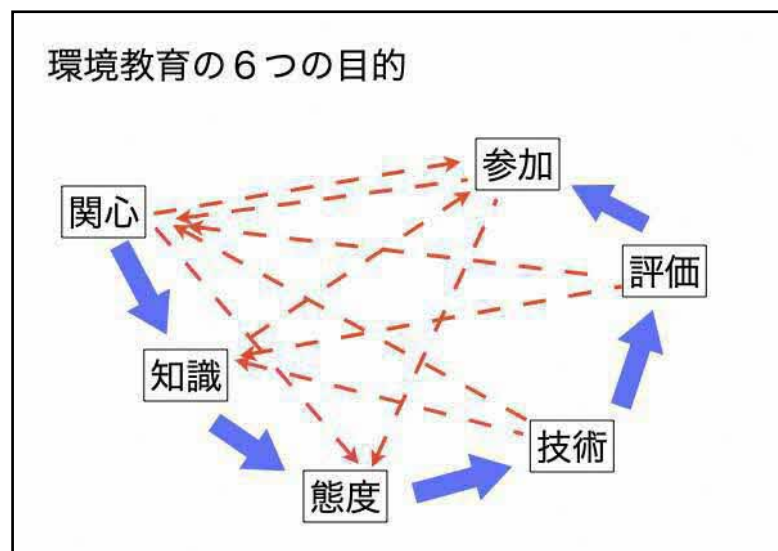
1975年には当時のユーゴスラビアのベオグラードで国連が主催となる環境教育専門家会議が開催され、環境教育のための指針「ベオグラード憲章」が発表されました。憲章には環境教育の目標を『環境とそれにむすびついた諸問題に関心を持つ人の全世界的な人間の数を増加させること。その人達は、知識、技術、態度、意志をもち、現在の問題の解決について、個人的にも集団的にも貢献をなしえて、現在だけでなく、将来の新しい問題にも貢献しうる人達であること。』として明記されました。要するに、環境教育を行う時には「環境への関心・知識・態度・技能・評価能力・参加」といった6つの目標を身につけることがゴールとされました。ちなみに、2003年に成立した日本の環境教育推進法や2005年から始まった国連持続可能な開発のための教育（ESD）の目標においてもこの6つの目標をベースにされています。

1977年には旧ソ連グルジア共和国のトビリシで環境教育政府間会議が行われ、国連に加盟している全ての国が「ベオグラード憲章」を尊重し、環境教育を推進するための方向性が話し合われ、その後の環境教育の基本的な考えとなりました。この年、日本では環境教育研究会が発足しました。

### \*ポイント・・・6つの目標と環境の村

関心・知識・態度・技能・評価能力・参加というベオグラード憲章に示された6つの目標は環境の村事業の目的でもあります。そこで、アースファミリーキャンプの実施時に一人ひとりの参加者にプログラムが始まる前と後で、6つの目標への達成度という視点でその変化をアンケート形式で答えてもらい、効果分析を通してプログラムの効果を検証し、次回への改善につなげながら、より効果的なプログラムの組み立てを検討しながら実施してきました。その結果、6つの目標の一つだけを目指しても参加者の環境への意識は変わらず、6つの項目をどれが初めでも構わないので、全てに関わる活動やメッセージに込めることが大切だということがわかりました。

このことから、環境の村事業の計画をされるときは、単に活動を実施するだけではなく、目的を明確にして、尚且つ、その目的がこの国際的にオーソライズされている6つの目標をカバーして企画することが大切になります。このことは、SDGsの17の目標にも言えることで、17の目標の一つ一つが独立しているのではなく、全てが相互に関連していることを意識しながら取り組むことが重要です。



### 3 環境教育から持続可能な社会のための教育へ

1975年：国際自然保護連盟がUNEPとWWFとの共同で「世界保全戦略」というレポートを出版し、合理的な地球資源の管理に関する教育と生物多様性を維持するための提案を行い、その中ではじめて“持続可能な発展”という概念が打ち出されました。

1982年：UNEPの理事会（通称：ナイロビ会議）でストックホルム会議（1972年）で採択された行動計画が見直され、今後10年間に取扱うべき環境問題について話し合わせ、大学、研究所、企業における環境教育の養成システムの必要性が提案されました。

1984年：環境と開発に関する世界委員会（WCED）が発足し、“Our Common Future”と題したレポートを発行。その中で“Sustainable Development”の定義を『次世代の必要分を奪うことなく現代人の必要を満たすこと。』とされました。加えて、学校教育への環境教育の必要性と、その方法として『すべての教科へ入れ込むこと（主流化）』が提言されました。

1987年：トビリシ会議の10周年として、UNEPとUNESCOが共同でモスクワにおいて環境教育専門家会議が開催されました。トビリシ会議からの10年間に於ける世界の環境教育の取り組みを再検討し、新たな環境教育政策を打ち立てるための具体的な戦略を含めた、「1990年代のための環境教育とトレーニングのための行動計画の国際戦略」を提案しましたが、拘束力を持たすことはできませんでした。

1992年：第2回目となる国連環境開発会議（通称：地球サミット）がリオデジャネイロで行われ、初めてNGOが参加し、公的機関と共同で行われた最大級の環境会議となりました。この地球サミットには日本を含めて180カ国以上の人々が参加し、持続可能な発展がどのように実行に移せるのかが大きなテーマとして話し合わせ、国際的行動計画『アジェンダ21』が提案されました。その中で、環境教育は“持続可能な社会の実現”を可能とするための方法の一つとして“教育、意識啓発及び訓練の推進”として明記されました。この提言の基本的な原則となっているのはトビリシ政府間会議の宣言と勧告であり、1）持続可能な開発へ向けた教育の再編成、2）意識啓発の推進、3）研修の推進の3つが提案されました。

1993年：リオでの地球サミットで採択された『アジェンダ21』に基づき、日本では環境基本法が制定され、その翌年の1994年には環境基本計画が閣議決定されました。この中で、「環境基本計画は、環境への負荷の少ない循環を基調とする経済社会システムが実現されるよう、人間が多様な自然・生物と共に生きることができるよう、また、そのために、あらゆる人々が環境保全の行動に参加し、国際的に取り組んでいくこととなるよう、『循環』、『共生』、『参加』及び『国際的取組』が実現される社会を構築することを長期的な目標として掲げた。」として、『循環』、『共生』、『参加』及び『国際的取組』という4つのキーワードが日本の環境政策における重要な要素として提示され、その後の条例などの様々な取り組みに発展していき、環境教育を実施する上でも欠かせないキーワードとなっていきます。

1997年：UNESCOとギリシャ政府の主催により、ギリシャのテサロニキにおいて『環境と社会に関する国際会議(持続可能性のための教育とパブリック・アウェアネス)』が開催されました。この会議においてテサロニキ宣言が提案され、その中で環境教育の検証が行われました。ここでは、環境教育は1977年に行われたトビリシでの環境教育政府間会議の勧告に基づいて発展・進化し、アジェンダ21や他の主要な国連会議で議論されるようなグローバルな問題を幅広く取り上げ、持続可能性のための教育としても行われてきました。このことを踏まえ、環境教育を“環境と持続可能性のための教育”であると確認されました。



また、持続可能性のための教育は、持続可能な未来を達成するための手段として理解され、人口、貧困、環境劣化、民主主義、人権と平和、開発と相互依存などといった概念とも関係し統合するようなものとして捉えられ、『持続可能性のための教育』という広い概念として発展するには環境教育の経験から多くのことを学ぶことができると認識されました。

\* ポイント・・・日本の環境基本法や環境基本計画

企画を始める時、時には事業として決まっていることを実施しなければならないこともあるでしょう。しかし、「こんなことをやってみよう」という企画者の思いも大切にしてください。しかし、思いだけでは成功する事業にはなりません。環境教育に関するその時々々の国の政策や各自治体が行っている環境への取り組みと連動することも大切です。さらに、対象とする人々の関心や問題意識を把握し、その上で、地域の特性やフィールドに合わせて企画を立てていくことが重要になります。思いつき企画では共感を得ることができません。詳しくは、前回まとめた『北海道・環境の村・環境教育プログラム実践マニュアル』に詳しく説明していますので参考にしてください。

#### 4 持続可能な社会のための教育とSDGs

環境の村では環境教育指導者養成をテーマにした事業を多く行ってきましたが、学校の先生で参加されるのは大抵が理科の先生か社会科でも地学とかの先生が9割を占めます。日本で環境教育が盛んになり始めた90年代、環境教育の先進国アメリカの大学の先生や行政機関の環境教育担当者から、「アメリカの環境教育が20年経ち、自然のことを学ぶことが環境教育になってしまった。本来はもっと大きな概念でスタートしたはずなのだが、本来の環境教育からは程遠くなってしまった。日本も間違わないように。」とよく聞かされました。まさに、環境教育を自然の理解だけではなく、もう少し広い概念で捉えないと、2015年から世界中で取り組まれているSDGsを理解することができません。



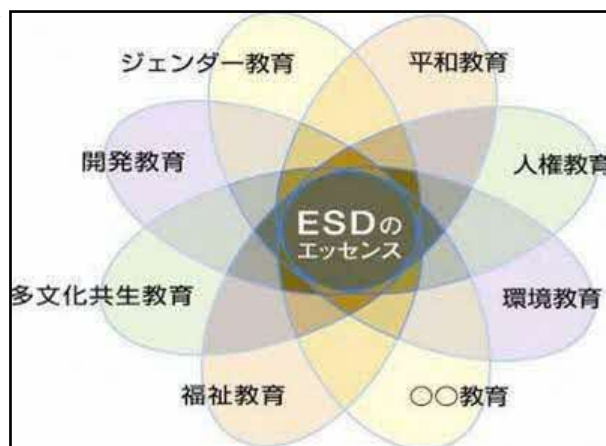
日本で環境教育がスタートする頃、もう一つの動きとして開発教育や国際理解教育への取り組みが行われるようになっていました。開発教育は1960年代に欧米で始まった教育活動として日本では1970年代から活動が始まり、1982年には開発教育協議会がスタートしました。90年代になると、「何を学ぶのか」といった教材の開発と同時に「どのように学ぶのか」といった参加型の教材が開発されていきます。このタイミングは、アメリカの環境教育教材のProject Learning TreeやProject WILDが参加体験型の環境教育教材として日本に紹介された時期と重なり、開発教育との接点を共有しながら環境教育を推進してきました。そして、1997年にはProject WET活動事例集が構成主義に基づいた新しい環境教育教材としてアメリカで開発されています。開発教育についての詳しくは以下の開発教育協議会のホームページをご覧ください。

<http://www.dear.or.jp/>

2000年にはニューヨークで国連ミレニアム・サミットが行われ、「国連ミレニアム宣言」が採択されます。このミレニアム宣言を受け、90年代に提案されていた「国際開発目標」が統合されて2001年にミレニアム開発目標(MDGs)が策定されます。極度の貧困や飢餓の撲滅など、8つのゴールを設け、加盟各国がその達成に向け努力することとされました。



その後、2002年に開催されたヨハネスブルグサミットで『持続可能な開発のための教育』を日本政府が提案し、2005年から10年間を『国連持続可能な開発のための教育（ESD）』の10年がスタートします。ESDのテーマは、環境教育と開発教育に関連した学習内容がほとんどで、特に2002年から始まった「総合的な学習の時間」に環境や開発教育・国際理解が盛んに行われるようになっていきました。



2015年：ニューヨークの国連本部で開催された国連サミットで、『持続可能な開発目標』（Sustainable Development Goals：SDGs）を中核とする『持続可能な開発のための2030アジェンダ』が採択されます。ここで注目されるSDGsは2001年から取り組まれていたMDGsの取り組みの成果を踏まえ、気候変動や経済的不平等、イノベーション、持続可能な消費、平和と正義などの新たな分野を優先課題として盛り込んでいるところです。目標として17のゴールと169のターゲットが設定され、実施手段、フォローアップ・レビューが政治宣言とセットになって発表されています。詳しくは環境省のホームページをご覧ください。

<http://www.env.go.jp/earth/sdgs/index.html>

その中でもターゲット4.7には「2030年までに持続可能な開発と持続可能なライフスタイル、人権、ジェンダー平等、平和と非暴力の文化、グローバル市民、および文化的多様性と文化が持続可能な開発にもたらす貢献の理解などの教育を通じて、すべての学習者が持続可能な開発を推進するための知識とスキルを獲得するようにする。」というように、ESDがターゲットの一つとして位置付けられています。しかしESDの目標である「未来を変える人づくり」は全てのSDGsの目標を達成するための基盤であり、一つだけの目標をゴールとするのではなく、環境教育プログラムを企画するときは互いに関連したものとしてプログラミングしていく必要があります。



2020年から始まる『学習指導要領』には新たに前文が書き加えられ、教育基本法に明記されている「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期す。」という目的のもとに5つの目標が以下のように明記されています。

- 1 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。
- 2 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

- 3 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。
- 4 生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- 5 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

その上で、「一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」というように、「持続可能」という言葉が学習指導要領に明記されています。

以上、世界の動きを中心に環境教育を取り巻く状況を説明してきました。また、日本の環境教育の発展において自然教育と公害教育を欠かすことができません。私たちが環境教育を実施する時、SDGsの基本である、「誰一人取り残さない」という理念と環境教育を結びつけ、17の目標との関連を意識しながら企画していくことが大切です。

## 5 SDGsとCOVID-19パンデミック

COVID-19パンデミックが始まってから、グローバルな社会の脆弱さが目につくようになってきました。特に、SDGsの目標とした課題が重要になってきたと言えるかもしれません。

SDGsを主導するUNDP（国連開発計画）の総裁は「健康、教育、所得という3つの点で打撃を与えている新型コロナウイルス感染症は、これまでの動向を一変させてしまうかもしれません。」という

コメントを出しています。UNDPのホームページでは、「新型コロナウイルスのパンデミック（世界的流行）により、私たちは新しい世界を迎えました。日常というものが失われたのです。富める者も貧しい者も、コロナ禍により私たちは、生き方のほとんどすべての側面に対して再考を余儀なくされました。コロナ禍は、持続可能な開発目標（SDGs）を達成するための挑戦であると同時に、大きな機会でもあります。」としています。

そして、「二重らせんのようにSDGsと新型コロナウイルス危機への対応は絡み合っており、断片的なアプローチで取り組むことはできません。科学者たちは、無制限の森林伐採、野生生物の違法取引、そして動物から人間への伝染病などは制御不能な感染症の大流行を引き起こす可能性があることを何年も前から警告してきました。だからこそ、グリーン経済への投資は、人と地球のバランスを回復させ、各国の復興を支援するために極めて重要です。UNDPは過去のやり方を卒業しつつあります。コロナ禍によって、かつては全く想像もできなかったような、私たちの仕事のあり方を再設計するに至っているのです。」と、SDGsの取り組みをさらに進めると同時に、新たな創造的な取り組みが必要と締めくくっています。

このような歴史的な転換期に環境の村のこれまでの事業の整理が皆さんのSDGsへの取り組みの一助になれば幸いです。



## 環境の村事業の10年レポート

2011年から取り組んできた環境の村事業を単なる事業報告書ではなく、また、この事業と同じ内容の事業をコピーして実施するのでもなく、あくまで一つのケースとしてご覧ください。と言いますのも、事業は旬が大切です。その時の社会の情勢、地域で起こっていること、人々のニーズやこれからの関心事などとそれぞれの要素を方程式のように組み合わせて企画を作っていくものです。そこで、皆さんがこれから環境教育事業を企画されるといった前提で、各事業をケースとして、できるだけ一般化できる視点で描いてみました。

各事業では、【企画ストーリー】【提案】【レポート】【活動のポイントと注意点】という4つのテーマに分かれています。【企画ストーリー】はそれぞれの事業のアイデアや実施に移していく時のポイントを、【提案】ではこれから環境教育事業を検討されている皆さんへのメッセージを、【レポート】では1つのケースとして参考にしてください。最後の【活動のポイントと注意点】はそのページと関連するテーマを今の時点における視点で書いています。

この10年間は北海道が主催する環境教育事業として、環境の村のコンセプトである「体験から学ぶ」視点を忘れず、先進的で実際的な視点で取り組んできました。環境問題の解決、グローバルな環境課題に対する取り組みに対して答えは過去にはありません。科学的な視点と文化や歴史、人の心理などを複合して答えを求めなければなりません。この10年はまさに新たな答えを求める試みの連続でした。この10年のレポートがこれからの10年の参考になれば幸いです。

その上で、環境教育の今までの取り組みを理解した上でこれからの取り組みを行っていただければとの思いから書き起こしてみました。環境教育における今までの流れを理解し、さらなる事業を行っていただければと思います。

## アースファミリーキャンプの実際・2011

## 秋の森で環境センスを身につける

【企画ストーリー】環境センスは遊びから身につきます。誰かに言われるのではなく、自分がやりたいことをやる自由があることが遊びの最低条件。いくつかの遊びの用意をしておき、その中から自分がやってみたいことに主体的に関われる環境の村のキャンプにしました。ゲストは本人も遊びが大好きで小樽で子どもたちの自然体験を提供しているNPO法人の代表にお願いしました。

【提案】子どもたちが自然を好きになるには、見本というかモデルが大切です。遊びに熱中する大人が身近にいることが教えることよりも大切です。大人をモデルに子どもは育っていきます。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2011年9月17日(土)10:00-18日(日)15:00
- ・ 場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・ ゲスト：安原 政志 (NPO法人自然教育促進会代表)
- ・ スタッフ：スタッフ5名、ボランティア3名
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:20 ゲストの紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション・アイスブレイキング
- 11:00 昆虫トラップ仕掛・釣竿の調達
- 12:10 昼食 (持参したお弁当)
- 13:10 魚釣り・弓矢作り
- 17:30 夕食作り (豆カレー、野菜カレー、チキンカレー)
- 20:00 ナイトプログラム
- 22:30 就寝

## (2日目)

- 6:30 朝食作り・朝食 (オープンサンド)
- 9:00 昆虫トラップ確認
- 10:15 葉っぱのランチョンマット作り
- 11:30 昼食作り・昼食 (3食丼)
- 13:30 大きなミズナラまでハイキング
- 14:30 2日間のふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

## ・ 準備と主体性

オオイタドリや柳の木を使って竿を作り、土の中からミミズを探して餌にしました。このプロセスが大切です。(木を切る場合は事前の許可が必要です。)与えられる道具ではなく、必要な道具を自分で作る。時間もかかり、手間もかかり、活動を体験するということでは効率的ではありませんが、大人が手を出しすぎると子どもの学びは低くなってしまいます。もちろん、何を目的とするかで重点の置き方も変わってきます。



## アースファミリーキャンプの実際・2012

## 昆虫の棲む森と環境

【企画ストーリー】昆虫へのミクロな目とマクロな目で観察し、自然への関心を持つきっかけにしてほしい。多くの場合ゲストの顔が浮かんでからテーマを決め、内容はゲストと一緒に作っていくことが多いです。今回はTECのボランティアの方で、昆虫の知識だけではなく、教え方や子どもたちへのアプローチがとても上手な方をお願いすることができました。春頃からゲストの日程を確保し、事業実施が決定次第内容を固め、広報に入ります。企画を楽しんで組み立てている時点で参加者は集まったと実感できるものです。

【提案】地域には様々な特技をお持ちの方がおられます。日頃から関係を作っておくといろいろなアイデアが出てきたりするものです。昆虫だけではなく、環境への接点を検討して、地域の方と一緒にプログラムを行ってみてください。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・日程：2012年8月11日(土)10:00-12日(日)15:00
- ・場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・ゲスト：原内 裕（北海道トンボ研究会理事、酪農学園大学非常勤講師）
- ・スタッフ：スタッフ3名、ボランティア3名
- ・スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:15 ゲストの紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション・アイスブレイキング
- 11:30 昼食（持参したお弁当）
- 12:30 昆虫が集まる仕掛け作り
- 14:10 昆虫の住処を探そう
- 16:45 夕食作り（豆カレー、野菜カレー、チキンカレー、ポークカレー）
- 19:30 ナイトプログラム（ライトトラップに集まる昆虫）
- 21:00 入浴・就寝

## (2日目)

- 6:30 ペットボトルトラップの回収
- 8:00 みんなで朝食作り&朝食
- 10:00 森の落とし穴回収
- 11:30 昼食作り・昼食（豚丼）
- 13:00 昆虫の名前調べ
- 14:15 2日間のふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・昆虫の名前調べ
  - 一人ひとりに透明の昆虫ケースとガイドブックを渡し、自分で特徴を見ながら同定していきます。3歳の幼稚園児も飽きずに1時間、目の前の虫とガイドブックを見比べて取り組みました。

## アースファミリーキャンプの実際・2013

## 森が大好き・エコロジカルキャンプ

【企画ストーリー】毎年同じ場所でキャンプをしているとこの次のアイデアが参加者から出てくることも多くあります。前年の夜の昆虫観察に刺激されて、「コウモリを見てみたい」という声に答えてのプログラム。企画作りはいろんなところから始まります。ゲストはやはり知り合いの専門の方をお願いし、事前に確認しての実施となりました。

【提案】夜の森は賑やかです。それぞれの生き物が捕食者と被食者に分かれて個体の特徴を生かして活動する時間です。ただし、夜の森は危険もいっぱいありますので、リスクマネジメントはしっかりしなければなりません。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2013年8月10日(土)10:00-11日(日)15:00
- ・ 場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・ ゲスト：村野紀雄さん（元酪農大学教授）
- ・ スタッフ：スタッフ3名、ボランティア10名
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:10 ゲスト・ボランティアの紹介・自己紹介・オリエンテーション
- 11:00 アイスブレイキングゲーム
- 12:00 昼食（持参したお弁当）
- 13:00 森で遊ぼう（ボランティアの大学生が中心にProject WILDで環境ゲーム）
- 14:30 お昼寝（夜のコウモリ観察に備えて）
- 15:30 夕食作り
- 19:30 ナイトプログラム（コウモリ観察）
- 21:30 入浴・就寝

## (2日目)

- 7:00 朝のストレッチと散歩
- 8:00 みんなで朝食作り&朝食
- 9:30 Project WILDでコウモリの森を体験
- 11:45 昼食作り・昼食
- 13:30 木を植えよう
- 14:30 2日間のふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

## ・森のコウモリ

コウモリは空を自由に飛ぶ哺乳類です。でも、コウモリは鳥獣保護管理法によって、駆除目的や飼育する目的などによる捕獲ができません。目で見て、バッドディテクターを使って音を聞いてください。



## アースファミリーキャンプの実際・2014

## 森の音あそび・五感の楽しみ

【企画ストーリー】プログラムの企画はネットワークが非常に重要です。ゲストのロビン・ロイドさんとは20年以上の知合いで住所は京都の方ですが、他の仕事の関係でお招きすることができました。また、ロビンさんの音楽は楽譜を基調としたものではなく、アフリカやインドなどの体のリズムを大切にしましたもので、自然への近づき方の一つの方法として企画しました。また、世界中の楽器を持ってきてもらい、楽器を通して世界を知り、環境を知るきっかけとしました。

【提案】環境教育にとって自然への関心は欠かすことができません。そのアプローチは五感を敏感にすることです。今回は素敵なご縁で音を入り口としましたが、視覚、聴覚、嗅覚、味覚を使ったプログラムを作ってみましょう。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2014年8月2日(土)10:00-3日(日)15:00
- ・ 場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・ ゲスト：ロビン・ロイドさん（自然音楽家）
- ・ スタッフ：スタッフ3名
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:00 ゲストの紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション
- 11:00 アイスブレイキングゲーム
- 12:00 昼食（持参したお弁当）
- 13:00 森の音あそび
- 15:45 フリータイム
- 16:30 夕食作り・夕食
- 20:00 ナイトハイク（星を見ながらロビンさんのカリンバ）
- 20:45 入浴・就寝

## (2日目)

- 6:30 朝のストレッチと散歩
- 7:00 みんなで朝食作り&朝食
- 9:30 ロビンさんの森のコンサート
- 10:30 みんなで音あそび・音を絵にしてみよう
- 12:00 昼食作り・昼食
- 13:30 森で踊ろう
- 14:30 2日間のふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・ 2日間のキャンプ
  - 2日間を通して「音楽」をテーマとしましたが、学校の音楽とは違い、今まで音楽が嫌いだった子どもが大好きになってしまいました。

## アースファミリーキャンプの実際・2015

## 一緒に作ろう・エコロジーな暮らしの実践

【企画ストーリー】参加者一人ひとりがプログラムの企画から関わることでプログラムの幅が広がり、自分毎として環境を捉えることができないだろうか？そして、急速に広まってきたSNSを使って事前に参加者と交流しながら準備をし、当日は皆で一緒に体験するという今までにない形でのプログラムにしてみました。

【提案】COVID-19パンデミックでフィジカルディスタンスが求められるようになり、急速にオンライン環境が普及しました。オンラインと実際の体験を使ったハイブリッドなプログラム運営により、環境を自分事としてとらえる学びに繋がっていく可能性が広がりました。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・日程：2015年9月12日(土)10:00-13日(日)15:00
- ・場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・スタッフ：スタッフ3名
- ・スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:00 ゲストの紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション
- 10:45 雨をつかまえよう
- 12:00 昼食(持参したお弁当)
- 13:00 タヌキ山登山
- 17:00 夕食作り・夕食(チキンカレーとパエリア)
- 20:00 入浴・就寝

## (2日目)

- 7:00 みんなで朝食作り&朝食
- 9:15 昼食作り(おにぎり)
- 10:30 魚釣り
- 12:30 昼食
- 13:30 パチンコ作り
- 14:30 2日間のふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・一緒に企画を作ってみよう

インターネットを利用することで参加者と実施者、参加者同士の交流が簡単にできるようになりました。自己紹介や活動のアイデアを共有し、全員が同じでない活動を同じ時間で安全に実施できる環境さえ準備できれば自分のやりたいことができるアースファミリーキャンプになります。そうすると、個人や家族だけでいいのかもしれませんが、一緒にやれる仲間がいるとより楽しいものです。準備と調整が非常に煩雑で大変ですが、満足度の高い企画となり、学びとして残っていることも多いものです。

## アースファミリーキャンプの実際・2016

## 自然と接近・エコロジーな暮らし

【企画ストーリー】アースファミリーキャンプを初めて7年目になり、参加者の半数ほどがリピーターとして参加されるようになりました。また、場所も道民の森を使っているのですが、参加者から道民の森ハイキングがしたいという希望もあり、ハイキングコースをゆっくり歩くこととしました。このような参加者から希望が寄せられるようになったのは、前年度と一緒に作ろうというように、一方的なプログラムではなく、環境の村を自分毎として意識してくれている参加者に答える形で今年のプログラムを計画しました。

【提案】環境教育のゴールは環境を自分毎として捉え、行動できる道民を育てることです。アースファミリーキャンプで自然の中での過ごし方を練習し、自分たちで過ごせる地球市民を育てていきましょう。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・日程：2016年9月10日(土)10:00-11日(日)15:00
- ・場所：当別町道民の森神居尻地区
- ・スタッフ：スタッフ3名
- ・スケジュール

## (1日目)

- 9:00 スタッフ集合・場所の準備・参加者の受付
- 10:00 ゲストの紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション・アイスブレイキング
- 11:15 お散歩
- 12:30 昼食(持参したお弁当)
- 13:30 大きなミズナラ登山
- 16:30 夕食作り・夕食(チキンカレー、豆カレー)
- 19:30 ナイトプログラム
- 20:30 入浴・就寝

## (2日目)

- 6:30 朝の散歩
- 7:00 みんなで朝食作り&朝食
- 9:15 昼食準備(ピザの生地発酵)
- 10:00 森の中の冒険あそびば
- 11:20 昼食(火を起こしてピザ作り)
- 14:15 2日間のふりかえり
- 14:45 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・自然と天候

1日目の集合時は雷雨でした。天候チェックは自然の中で行う場合は非常に大切です。できれば1週間ほど前から天気の傾向を把握し、当日の天気を予測しながら準備を行います。その上で、雷雨の時は無理をしないよう行動しましょう。もちろん、この日は雷が通り過ぎた清々しい森を歩きました。



## アースファミリーデイキャンプの実際・2017

## 森の中に環境の村を作る

【企画ストーリー】今年からアースファミリーキャンプがデイキャンプになり、近くの自然に目を向け、「近くの自然の中でも楽しく過ごせる」と思え、「暮らしの周りにある自然に目を向ける」機会になるような場所を検討しました。ちょうど数年前より、TECでは山裾に広がる私有地の森をお借りして森づくりに取り組んでいたもので、その場所で森づくりのお手伝いをしていただきながら1日を過ごせないかと計画してみました。そして、自分たちで工夫しながら遊べる場所を作ってる「プレイパーク」を作りながら、自分たちの環境を自分たちで作出し、その自然を保全しながら楽しめる方法を考えることにしました。

【提案】自然体験は決して深い大自然や珍しい自然の中だけではありません。それ以上に、身近な人が関わっている自然への関心こそ大切です。皆さんも地域の自然の中に環境の村を作ってみましょう。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・日程：2017年9月10日(日)10時集合、15時解散
- ・場所：当別町金沢の森（金沢地区）
- ・スタッフ：スタッフ3名
- ・スケジュール
  - 9:00 スタッフ集合・場所の準備
  - 9:45 参加者の受付
  - 10:15 参加者自己紹介・オリエンテーション・森を歩こう
  - 12:15 昼食（持参したお弁当）
  - 13:00 森の中にプレイパークを作ろう
  - 14:45 ふりかえり
  - 15:15 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・身近な自然の中で楽しみ遊ぶ
 

整備されていない森にはブドウやコクワのツルが木々に巻きついています。強度と周囲の環境を確認しながらのターザンごっこはダイナミックで夢中になります。小さな子どもたちにはロープを準備しておき、太い枝と平らな地面のところを探し、ブランコを作るのも楽しい遊びの一つになります。この時、お父さんやお母さんの出番です。一緒に楽しみましょう。
- ・森づくり
 

私たちの森づくりではエンジンなどの機械は使わず、ササを刈る時は大きな剪定バサミを、枝を切るときは手ノコギリを使ってゆっくり作業します。作業ではなく、行為自体を楽しみ、学びに結びつけていきます。木を切っていると、堅い木もあれば、柔らかい木もあります。匂いも木によって違います。五感をフルに使って自然に立ち向かってみましょう。小さな虫も見つかるでしょう。身近なところに、その場所ならではの自然の生態系が見えてくることでしょう。

## アースファミリーデイキャンプの実際・2018

## 森の音遊び

【企画ストーリー】プログラムの企画ではネットワークが非常に重要です。ゲストには2014年のアースファミリーキャンプに引き続いてロビン・ロイドさんにお越しいただきました。この時も他の仕事の関係でお招きすることができました。また、ロビンさんはアフリカの民族楽器に詳しく、どの楽器も使いこなせるミュージシャンです。音という感覚とその背景の文化や暮らしを一緒に語ってもらうことで、国際感覚を身につけることも目的としました。

【提案】環境教育にとって自然への関心は欠かすことができません。普段見慣れた自然を違う視点でスポットを当ててみると、自分たちのコミュニティへの見方も広がります。視覚、聴覚、嗅覚、味覚を使って地域の環境に関心が向くようなプログラムを作ってみましょう。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2018年10月14日(日)10時集合、15時解散
- ・ 場所：当別町金沢の森（金沢地区）
- ・ ゲスト：ロビン・ロイドさん（ミュージシャン）
- ・ スタッフ：スタッフ2名
- ・ スケジュール
  - 9:00 スタッフ集合・場所の準備
  - 9:45 参加者の受付
  - 10:20 ゲストの紹介・参加者自己紹介  
オリエンテーションとアイスブレイキング
  - 11:00 森を歩きながら「音あそび」
  - 12:15 昼食準備（食堂で食材をスープとパンケーキ）
  - 13:15 森のミニコンサート
  - 13:45 音でコミュニケーション
  - 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・ 森の中で音あそび
 

森の中を歩きながら手頃な枝を見つける。その枝をスティックにして近くの木や葉を叩き音を出してみましょう。木の種類、太さ、元気さで音が違います。参加者がそれぞれ勝手に音を出し始め、ゲストがリズムを刻みながら全員で森の中で合奏し始めると自然のリズムと一体となった感じがしてきます。木や葉っぱを見る目が変わってきます。
- ・ 森のミニコンサート
 

「世界の人口の3分の一しか楽譜を使って音楽していないんだよ。」という語りから始まる音を使ったプログラム。アフリカの楽器を中心に誰もが簡単に音が出せるコンサートにすることで音楽へのハードルが低くなり、気持ちいい自然の空間で音楽を楽しむことも環境への関心を持つ大きなきっかけとなります。

## アースファミリーデイキャンプの実際・2019

## 晩秋の森で北欧風のデイキャンプ

【企画ストーリー】運営団体のTECが事務所を置く当別町はスウェーデンのレクサンド市と姉妹都市関係があります。TECでは10年以上にわたりレクサンドの自然保育や自然保護に関わる方々と交流を続けながら様々な自然の中での過ごし方を共有してきました。今回はレクサンドの仲間が来日する機会に、多くの方にスウェーデンの人たちの自然の中での遊びやアウトドアクッキングを体験してもらうことを目的に実施しました。



【提案】他の文化への関心は多くの方がお持ちです。特に、皆さんの町の他の国と姉妹都市関係などで交流をしていると尚更です。今回はデイキャンプとして自然体験をキーワードとしましたが、環境に関連したテーマで事業を行っていきましょう。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・日程：2019年10月27日(日)10時集合、15時解散
- ・場所：道民の森神居尻地区周辺
- ・ゲスト：スウェーデンレクサンドから（通訳一人）
- ・スタッフ：スタッフ2名、ボランティア2名
- ・スケジュール
  - 9:00 スタッフ集合・ミーティング・昼食の準備
  - 9:30 参加者の受付
  - 10:20 ゲスト紹介・参加者自己紹介・オリエンテーション
  - 10:40 秋の森の散歩
    - クubb（スウェーデンの野外遊び）で遊ぶ
  - 12:30 昼食準備（食堂で食材をスープとパンケーキ）
  - 15:00 森の中で自由遊び
  - 15:30 終了・解散



【活動のポイントと注意点】

- ・スウェーデンの遊び「クubb(Kubb)」
  - バイキング時代の文化から生まれた野外での遊びです。当別町にあるスウェーデン交流センターでお借りすることができます。
  - \*クubbについてのwebページ<https://kubbjapan.jimdofree.com/>
- ・アウトドア・クッキング
  - スウェーデンの人たちが自然の中で過ごす時、寒い季節になるとランチは焚き火を囲んでホットドッグやパンケーキでソーシャルな時間を楽しみます。この日はスープとパンケーキにリンゴンジャムとKnäckebröd(クネツケブレッド)を持ってきていただきました。
  - \*野菜スープレシピ：コンソメと塩コショウの味付けにニンジン、ジャガイモ、タマネギ、ブロッコリー、豚肉の具材を使用しました。



## エコロジーワークショップの実際・2011

## 自然エネルギーのプラスとマイナス・フィールドワーク編

【企画ストーリー】この年の3月に起こった東日本大震災によって自然エネルギーに関心が集まりました。そこで、実際に自然からエネルギーを取り出している現場を見に行くツアーを企画してみました。また、このフィールドワーク編と対になる形で「自然エネルギー」をテーマとした連続セミナーを実施し、知識と実際の両面でこれからのエネルギーを考える機会を作りました。

【提案】自然エネルギーを使った仕組みがどんどん出てきています。太陽光、風力、小水力など、コミュニティの参考事例を見学してみましょう。その時に、プラスとマイナスの視点を持つことが大切です。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2011年11月6日(日)9:30時集合、16:30時解散
- ・ 場所：1)北海道グリーンファンド石狩風車見学  
2) (株) アレフ恵庭工場
- ・ ゲスト：中原准一さん（酪農学園大学教授）
- ・ 参加費：1,200円（昼食のお弁当・飲み物・保険）
- ・ 協力：(株) アレフ、NPO法人北海道グリーンファンド
- ・ スケジュール
  - 9:30 札幌駅集合
  - 10:15 石狩風車見学  
NPO法人 北海道グリーンファンド事業企画リーダーの小林 ユミさんのガイドで風車見学
  - 11:20 石狩風車出発
  - 12:00 TEC事務所で昼食（地域の自然食レストランのお弁当）
  - 13:45 株) アレフ恵庭工場到着  
(株) アレフ エコチームリーダーの佐々木 隆浩さんより説明をお聞きしたあと、工場見学
  - 15:30 株) アレフ恵庭工場出発
  - 16:45 札幌駅解散



## 【活動のポイントと注意点】

## ・ エコロジーワークショップ

環境問題の解決に向けた行動については決まった答えがなく、クリエイトするしかありません。そのためには知識と体験を欠かすことができませんし、同じように参加者同士でアイデアを出しあう機会が必要です。このように、環境を改善していくためのアイデアを話し合い、一人ひとりの行動に結びつけることを目的にエコロジーワークショップを行ってきました。

今回は自然エネルギーをテーマに、知識をエコセミナーで学び、実際にその現場を訪ねて体験したことを踏まえて参加者同士が話し合う場として移動のバスの中で話し合いました。

## エコロジーワークショップの実際・2012

## 北海道の野生動物とProject WILD

【企画ストーリー】自然に恵まれた北海道では野生生物と人との関係を考える場面が多くあります。また、今までも環境教育教材紹介としてProject WILDを紹介してきましたが、今回は専門家と一緒にProject WILDを取り上げることで、地域の野生生物の課題を体験を通して理解するスタイルの提案として実施しました。

【提案】ヒグマ、エゾシカ、アライグマなど北海道では身近に環境問題があり、啓発事業も多く実施されています。その時に、より理解を深めるには話を聞くだけではなく、体験をしながら学ぶことで理解も深まり、一人ひとりの行動に結びつけることができます。複数の教育手段を活用しながら啓発事業に体験型の教材が有効です。また、このような教材は地域に合わせて作り替えて実施することでより学びも深まります。

【レポート】時間配分やプログラムなどを参考にしてください。

- ・ 日程：2012年11月3日(土)・4日(日)
- ・ 場所：札幌市南区滝野自然学園
- ・ ゲスト：福井大祐氏（日本野生動物医学会認定専門医、人と野生生物の関わりを考える会副代表）  
山本 幹彦（NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表）
- ・ 参加費：6,600円（テキスト・傷害保険）
- ・ 協力：（財）札幌市青少年女性活動協会
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 10:00 参加者の受付
- 10:30 挨拶・オリエンテーション
- 11:00 ゲストスピーチ
- 12:00 昼食
- 13:00 実習：Project WILD体験
- 17:20 グループワーク
- 18:00 1日目終了

## (2日目)

- 9:00 グループワーク
- 11:30 グループ演習
- 12:00 昼食
- 12:45 グループ演習
- 14:30 まとめとふりかえり
- 15:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

## ・ Project Wild

Project Wildはアメリカで1980年代に開発された環境教育教材です。身近に生息する野生動物をテーマにしていて、地域の専門家と一緒にプログラムを計画してみましょう。

## エコロジーワークショップの実際・2013

## スウェーデンの幼児教育に学ぶ

【企画ストーリー】スウェーデンには今から約100年前に創設された野外生活推進協会という組織があり、幼児を対象としたムッレ教室というプログラムが50年前にスタートしました。このプログラムの趣旨は幼児を対象とした環境教育を自然の中で遊びながら行うもので、具体的な活動内容、教育手法、自然の中でのマナー、アウトドアクッキングなどを身につけるための指導者を対象としたワークショップがあります。TECでも北海道支部として登録していたことから2日間の指導者養成講座を実施しました。

【提案】『ムッレ教室』は日本の森のようちえんでも数多く取り上げられています。指導者養成の内容も系統的で実際に役立つ内容になっています。実施するには日本野外活動推進協会の本部に連絡をして講師を派遣してもらっての実施となります。以下のwebページをご覧ください。

<http://mulle.sakura.ne.jp/>

【レポート】実施されるときは時期や場所、講習料など講師と打ち合わせして決めてください。

- ・ 日程：2013年10月26日(土)・10月27日(日)
- ・ 場所：札幌市南区滝野自然学園
- ・ ゲスト：高見 豊さん（日本野外生活推進協会代表）  
山本 幹彦（NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表）
- ・ 参加費：3,500円（テキスト・傷害保険）
- ・ 協力：（財）札幌市青少年女性活動協会
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 9:00 参加者の受付
- 9:30 挨拶・オリエンテーション
- 10:40 実習：自然観察とゲーム
- 12:30 昼食
- 13:30 実習：幼児を自然に誘う
- 16:00 講義：子どもの心身と野外活動
- 16:00 講義：リーダーの心得
- 18:00 1日目終了

## (2日目)

- 9:30 実技：パン生地作り
- 10:00 実技：プログラムの作り方とグループワーク
- 12:00 昼食（ねじりパン）
- 14:00 グループ発表
- 15:45 まとめとふりかえり
- 17:00 終了・解散

環境の村2013・秋からの環境講習会

環境学習会  
エコセミナー  
コミュニティと環境をテーマに、地域に根ざした環境教育を考えてみる4回シリーズ

10/30 (木) シリーズ1  
「コミュニティデザインと環境教育」  
ゲスト：山口 洋典氏  
NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表

11/6 (水) シリーズ2  
「学校と環境教育」  
ゲスト：小塚紀美子氏  
東洋大学名誉教授・東海大学大学院院長

11/14 (木) シリーズ3  
「コミュニケーションと環境教育」  
ゲスト：川崎 直氏  
NPO法人 自然体験活動推進協会 代表

2/19 (木) シリーズ4  
「地域のネイチャーセンターと環境教育」  
ゲスト：山本 幹彦氏  
NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表

※全4回共通※  
場所：札幌市南区滝野2丁目・環境会館  
札幌市南区滝野3丁目  
時間：18:30～20:30  
参加費：無料  
定員：各回30名（先着順）  
※1日目の参加も大丈夫です。

環境教育リーダー養成  
エコロジーワークショップ  
「スウェーデンの幼児教育に学ぶ・森のムッレ教室指導者養成講習会」  
（スウェーデンの森のようちえん「ムッレ教室」指導者として、札幌から日本野外生活推進協会に学ぶ者向けです）

5回を合わせた自然体験活動の紹介、園地にもある自然環境の紹介、幼児教育の現場、園内のワークショップ、幼児と一緒に働く自然材料の扱い、実践やワークショップを中心とした講習です。

日程：10月26日(土) 9:00～18:30  
10月27日(日) 9:00～17:00  
※1日目のワークショップ、指導者は参加できません。  
料金：2,500円（テキスト、傷害保険として）  
定員：30名（先着順）

お問い合わせ・お申し込み：NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ（札幌市南区滝野754・当別小学校）  
TEL: 0113-22-4305 FAX: 0113-22-2263  
Mail: tectec\_ee@ybb.ne.jp Web: http://www.geocities.jp/tectec\_ee



## エコロジーワークショップの実際・2014

### 『学び方、教え方を変えよう』（主体性を育てる環境教育）

【企画ストーリー】環境教育をより効果的なものにするためには、環境を自分の事として関わり、行動に結び付けていくため、教えらる教育から主体的な教育への変化が必要です。そこで、1990年代初めからアメリカの環境教育教材を日本に紹介し、環境の村事業でも何度かこれらの教材を使った指導者養成を行ってきましたが、日本ではなかなか広まっていきませんでした。そこで、これらの教材を越えて、主体性を育てる環境教育の視点を学ぶ機会を設けました。

【提案】環境教育では「何を教えるか」と同時に、どのような学びの場を作り、一人ひとりの学びから行動に結びつけるかが大切です。

#### 【レポート】

- ・日程：2014年12月6日(土)・12月7日(日)
  - ・場所：札幌市Lプラザ会議室1+2
  - ・ゲスト：吉田新一郎（プロジェクト・ワークショップ事務局）
  - ・参加費：6,500円（飲み物、テキスト、資料代として）
  - ・協力：札幌市環境プラザ（公財：さっぽろ青少年女性活動協会）
  - ・スケジュール
- （事前課題）1）自分の環境教育史を書く。  
2）お勧めの環境や環境教育関連の図書を持ってくる。

#### （当日：1日目）

- 9:00 参加者の受付
- 9:40 挨拶・オリエンテーション・自己紹介
- 11:00 私が考えるベストの環境教育プログラム  
（昼食）
- 14:00 環境教育をする時に大切にしていること／大切にしたいことは？
- 14:45 ライティングワークショップの体験
- 16:15 実習：大切な石
- 17:00 1日目終了

#### （当日：2日目）

- 9:00 昨日のふりかえり報告
- 11:00 グループワーク：ベストの環境教育改善案づくり  
（昼食）
- 13:00 自分の持って来た本の紹介
- 13:45 ベストの環境教育改善案発表
- 15:15 小講義：資料を使って
- 17:00 終了・解散

（継続研修）事務局からお勧めの本を提案し、希望する本を読み込むグループを作り、インターネットを利用してのブッククラブを作って、週に1回の頻度で感想などを共有しながら、主体的な学びの実践者という目標に向かって学び合う仲間を作りました。





## エコロジーワークショップの実際・2015

## 主体的な学びの場のデザイン

【企画ストーリー】 主体的な学びのためには指導者のファシリテーションが大切です。今年は日本におけるファシリテーションの第一人者を招き、体験を通じた学びあいのデザインをテーマに実施しました。

【提案】 指導者養成では募集から始まり、事前の関わりを通して研修に主体的に関わる意識を作り、当日の研修と事後の継続研修を通して行動につなげなくては意味がありません。カークパトリックの4段階評価法を参考に、単なる当日の研修の満足度だけではなく、各自の学習の到達度、行動への変容、そして成果までを見据えた研修全体のデザインが重要です。そのために、事前3割、当日3割、事後が4割といった主催者の関わり配分を検討して研修を組み立ててみてください。

## 【レポート】

- ・ 日程：2015年12月5日(土)・12月6日(日)
- ・ 場所：札幌市Lプラザ会議室1+2
- ・ ゲスト：難波 克巳さん（玉川大学TAPセンター長 代理）
- ・ 参加費：3,000円（飲み物、資料代として）
- ・ 協力：札幌市環境プラザ（公財：さっぽろ青少年女性活動協会）
- ・ スケジュール

## (1日目)

- 9:00 参加者の受付
- 9:30 挨拶・オリエンテーション・アイスブレイキング
- 11:00 自己紹介を考える
- 12:00 昼食
- 13:00 自己紹介発表  
小講義：学びのABCサイクル
- 17:00 1日目終了

## (2日目)

- 9:30 今日のアイスブレイキング
- 10:00 演習・グループでアクティビティを考える
- 11:30 演習・グループごとにアクティビティの発表
- 12:30 昼食
- 13:30 演習・グループごとにアクティビティの発表
- 16:30 まとめとふりかえり
- 17:00 終了・解散



## 【活動のポイントと注意点】

- ・ ワークショップの組み立て  
一方向的な教える学びから一緒に学びを創造することを主眼にワークショップという呼び方がされています。そのために、講師と参加者は水平な関係になるように、始まりはアイスブレイクから始まり、目的を共有してから進めることが大切です。

## エコロジーワークショップの実際・2016

## アクティブ・ラーニングって何だ？

【企画ストーリー】Project Learning TreeやProject WILD、Project WETといったアメリカの環境教育教材を紹介し、環境の村においても指導者養成として活用してきました。そこで、これらの教材を使った主体的でアクティブラーニングにつなげていくためのポイントを紹介する研修が必要だとの思いから、これらの教材の中からいくつかのアクティビティを体験し、その指導法としてのファシリテーションや教材を活かすための学びのデザイン作りをテーマに実施しました。

【提案】北海道にもこれらの教材を使った指導者養成が行われ、指導者資格を持った方がおられます。そういった方々を地域の中から見つけ出し、地域の素材をテーマとした環境教育プログラムを実施してみましょう。

## 【レポート】

- ・日程：2017年2月12日(日)・3月5日(日)
- ・場所：札幌市Lプラザ会議室 1 + 2
- ・ゲスト：山本 幹彦 (NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表)
- ・参加費：1,000円 (飲み物、資料代として)
- ・協力：札幌市環境プラザ (公財：さっぽろ青少年女性活動協会)
- ・スケジュール
  - (1日目：2月12日(日))
    - 9:00 参加者の受付
    - 9:30 挨拶・オリエンテーション・アイスブレイキング
    - 10:40 質問作りワークショップ
    - 12:30 昼食
    - 13:30 アクティビティ体験
      - ・Project WILD
    - 16:00 ふりかえりのわかちあい
    - 16:40 1日目終了
  - (2日目：3月5日(日))
    - 9:30 オリエンテーション・アイスブレイキング
    - 11:10 アクティビティ体験
      - ・Project Learning Tree/Project WET
    - 12:30 昼食
    - 13:30 アクティビティ演習
    - 16:00 まとめとふりかえり
    - 16:30 終了



## 【活動のポイントと注意点】

- ・日程
  - エコロジーワークショップを今までは2日間連続で設定していましたが、日帰りを2回実施した方が参加者も参加しやすいという声から、内容は連続した形で2回に分けて行ってみるのも方法です。



## エコロジーワークショップの実際・2017

### その1) スウェーデンから学ぶ『野外で授業』プロジェクト

【企画ストーリー】環境教育の目的は責任ある行動を一人ひとりが行えるようになることです。環境に配慮した行動変容の要素として、環境の「何か」を学ぶ以上に2つの要因が大切だと80年代にアメリカで論文が発表されています。その一つが自然の中で多くの時間を過ごすことと、もう一つは大人の後ろ姿とあります。子どもたちは1日24時間のうちの3分の1の8時間を学校で過ごします。それ以外は睡眠が3分の1と残りの3分の1が家庭です。そこで、学校の授業を週に1時間でも野外で行うことで自然と触れる時間が増え、日々の暮らしの周りにはある自然に関心が向くきっかけになるとスウェーデンでは30年前から野外で授業を行うようになり、多くの学校で取り入れられるようになってきています。今までの日本での環境教育は「何を」教えるかに重点が置かれていますが、教育を行う方法とどこでという場所も考える必要があります。知識を教える環境教育ではなく、行動に結びつけるには重要な要素だということができます。

そこで、今回はスウェーデンの野外で授業のテキストの著者で実際に子どもたちへの授業を行っている2人が日本に来たタイミングでエコロジーワークショップを実施することになりました。

【提案】今まで紹介をしてきた環境教育教材は理科的な要素が多かったのですが、全ての教科を野外という自然の中で行える活動として紹介することで、学校全体で取り組むことができます。地域の学校に働きかけて取り組んでみましょう。詳しくは以下のホームページをご覧ください。

<https://learningoutdooredu.wixsite.com/mathbook>

#### 【レポート】

- ・ 日程：2017年11月12日(日)
- ・ 場所：札幌市Lプラザ会議室 1 + 2
- ・ ゲスト：Mats Wejdmark (ニュネスハムン自然学校代表ディレクター)  
Robert Lättman-Masch (ニュネスハムン自然学校スタッフ)
- ・ 通訳：山本風音 (NPO法人当別エコロジカルコミュニティー)
- ・ 参加費：1,500円 (飲み物、資料代として)
- ・ 協力：札幌市環境プラザ (公財：さっぽろ青少年女性活動協会)
- ・ スケジュール
  - 9:00 参加者の受付
  - 10:00 挨拶・オリエンテーション
  - 10:10 講義：スウェーデンの野外を利用した授業
  - 11:10 実習：野外で算数・英語体験
  - 12:30 昼食
  - 13:30 講義：野外で授業の効果と手法
  - 14:30 ふりかえりのわかちあい
  - 15:00 終了



## エコロジーワークショップの実際・2017

### その2) まわし読み新聞の手法を学ぶ

【企画ストーリー】 インターネットの普及に伴い私たちに多くの情報が届けられるようになり、その中からどのような情報を受け取り行動の指針とするかを見極めが求められています。このようなメディアリテラシーを身につけることが環境教育にとっても欠かすことができません。2015年のエコサロンでも一度取り上げましたが、今回は主体的な学びの手法として実施し、学校で取り組まれているアクティブラーニングの具体的な手法として紹介しました。

【提案】 このまわし読み新聞は大阪の陸奥 賢（むつさとし：観光家/コモンズ・デザイナー/社会実験者）さんが考案した大阪発信の「メディア遊び」です。オープンソースで「いつでも、どこでも、だれでもできる」が合言葉で、三省堂高校国語教科書『明解国語総合』（平成29年度版）でも採択され、NIE・NIB・アクティブラーニングに恰好のツールとしても注目されています。以下のホームページを参考にやってみましょう。

<http://www.mawashiyomishinbun.info/>

#### 【レポート】

- ・ 日程：2017年12月3日(日)
- ・ 場所：札幌市Lプラザ会議室 1 + 2
- ・ 講師：山本 幹彦（NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ代表）  
山本風音（NPO法人当別エコロジカルコミュニティ）
- ・ 参加費：1,000円（飲み物、資料代として）
- ・ 協力：札幌市環境プラザ（公財：さっぽろ青少年女性活動協会）
- ・ スケジュール
  - 9:30 参加者の受付
  - 10:00 挨拶・オリエンテーション・自己紹介
  - 10:20 実習：まわし読み新聞作り
  - 12:30 昼食
  - 13:30 実習：まわし読み新聞作りと発表
  - 14:30 ふりかえりのわかちあい
  - 15:00 終了

まわしよみ新聞のすゝめ  
まわしよみ新聞で環境教育ワークショップ

北海道環境の村エコロジーワークショップ  
2017.12.3 (sun) 10:00-15:00 @ 札幌エルプラザ

「まわしよみ新聞」とは、(観光家/コモンズデザイナー/社会実験者)の陸奥賢さんが考案した、大阪発の「参加型体験メディア遊び」です。互いに新聞を持ち寄って、それを話題に「みんなで読む」「相手に伝える」「多様な意見を聞く」ことで他者を知り自分の世界を広げる「コモンズ・デザイン」のコミュニケーションや学びの場です。また一人ひとりが選んだ記事をグループで集めて「まわしよみ新聞」として再編集するという手法を使って、環境教育の可能性を探ってみます。  
\*我が国最高の教育賞「読売教育賞」の最優秀賞を受賞!!  
\*三省堂高校国語教科書『明解国語総合』(平成29年度版)にも採択。

日程	2017年12月3日(日) 10:00-15:00	持ちもの：新聞 (5大紙程度が理想、2大紙程度でも可)
場所	札幌エルプラザ 2階 / 環境研究室 1+2	
定員	30名 (先着順)	
参加費	1,000円 (お茶と資料)	申し込み・お問い合わせ NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ Mail: iotec_ee@yahoo.co.jp TEL: 011-33-22-4305 FAX: 050-3710-7446
講師	山本 幹彦 (TEC) 山本 風音 (TEC)	



#### 【活動のポイントと注意点】

##### ・ 環境教育と情報

環境教育のゴールである行動を起こすためにはその方向性が重要で、そのために情報の入手と判断が欠かせません。特に、SNSが急速に普及してきたこの5年、今までと比較にならないほどの情報が入ってくるようになり、その中で有益な情報を選び取るセンスを磨くことが必要となり、今まで以上にメディアリテラシー教育が求められています。

## エコロジーワークショップの実際・2018

# 問題解決学習とアクティブ・ラーニングを学ぶ

【企画ストーリー】環境の村の環境教育の指導者養成では教える「何か」を学ぶのではなく、「どのように」教えるかに焦点を当てて行ってきました。今回は学校教育でも注目されている問題解決学習（PSL）、または課題解決学習（PBL）をテーマに、学習者の興味や関心に沿った学びの組み立てを学ぶことを目的に行いました。講座自体も参加者の興味に合わせた内容とすることで、参加者自身が体験しながら学ぶアクティブな学びの2日間としました。このようなワークショップをファシリテートする人材がポイントで、昨年1年間、デンマークで問題解決学習を学んでこられた立命館大学の先生に北海道に来ていただいて実施しました。

【提案】北海道にもこれらの教材を使った指導者養成が行われ、指導者資格を持った方がおられます。そういった方々を地域の中から見つけ出し、地域の素材をテーマとした環境教育プログラムを実施してみましょう。

### 【レポート】

- ・ 日程：2018年8月9日(木)－10日(金)
- ・ 場所：当別町白樺コミュニティーセンター
- ・ ゲスト：山口 洋典氏（立命館大学共通教育推進機構准教授）
- ・ 参加費：3,000円（資料、継続研修、お茶菓子代として）
- ・ スケジュール

#### （1日目）

- 9:30 参加者の受付
- 10:40 挨拶・講師紹介・オリエンテーション
- 10:35 小講義：Don'tのルールからLet'sのルールへ
- 10:55 インタビューゲーム・Appriative inquiry
- 12:15 昼食
- 13:15 他己紹介
- 14:15 ストーリーテリング
- 16:00 まとめと終了

#### （2日目）

- 10:00 ストーリーテリングのふりかえり
- 10:25 人生の感情ライン
- 12:30 昼食
- 13:30 身体を動かすゲーム・オープンスペーステクノロジー
- 15:45 まとめとふりかえり
- 16:15 終了



### 【活動のポイントと注意点】

- ・ PBLと総合的な学習の時間  
PBLやPSLでは学びは能動的な行為として捉え、自ら課題を発見し解決していく能力を身につけることを重視しています。まさに総合的な学習の時間にふさわしい学び方です。



## エコロジーワークショップの実際・2019

## 現場で役立つ環境教育

【企画ストーリー】 野外で授業の紹介を環境の村事業でも紹介したところ、森のようちえんに関係する方からの問い合わせが多く、また、今までは札幌を中心として指導者養成を行っていたので、広い北海道で各地で行えないかと旭川での実施を地元で森のようちえんとして活動されている「鷹栖森のようちえん ぴっぱら」と共同で行いました。学び方を従来の教室での学び方から校庭などの屋外に移動する時、教師だけではなく、保護者にも理解してもらわなければなりません。そこで、幼稚園に通う保護者の方にも参加してもらえないかと共同で実施することになりました。

【提案】 道内各地で森のようちえん（自然の中で過ごす幼児保育や幼児教育）が芽生えています。遊びながら学ぶことが幼児期にはとても大切とされています。また、幼児期における非認知能力の発達が注目されていますが、算数や国語などの要素も遊びの中に多くあり、指導者には子どもたち一人ひとりの学びへの関心のきっかけをとらえる目が求められています。近くの幼稚園や保育園、小学校と連携して野外での学びをテーマとした指導者養成を企画してみましょう。発達段階に合わせた環境教育の取り組みとして、幼児期から小学校段階は自然と親しむ時間を持つことが重要とされています。

## 【レポート】

## (1回目)

- ・ 日程：2019年11月10日(木)10:00-16:00
- ・ 場所：鷹栖森のようちえん ぴっぱら
- ・ ゲスト：山本 幹彦 ・ 草(NPO法人 当別エコロジカルコミュニティー)
- ・ 参加費：3,000円（資料、継続研修、お茶菓子代として）
- ・ 協力：鷹栖森のようちえん ぴっぱら
- ・ スケジュール

- 9:30 参加者の受付
- 10:10 挨拶・オリエンテーション・自己紹介
- 11:00 実習：野外で授業
- 12:30 昼食
- 13:30 講義：野外で授業の効果と教育手法
- 13:30 ふりかえり
- 16:00 まとめと終了

## (2回目)

COVID-19緊急事態のために中止



## 【活動のポイントと注意点】

- ・ 現場で役立つ教材

多くの指導者はすぐに使える活動を求めます。一見そのような活動はすぐに使えそうですが、その使い方や指導者の関わりによっては学びに繋がりません。指導者養成ではその視点で企画をしていくことが大切です。